

# 高校生の活躍

## 台風一過 笑顔 晴れ晴れ

山口県立光高等学校 ヨット部顧問 橋本健太郎



令和最初の全国高校総体（インターハイ）において、光高校ヨット部女子がコンバインド種目で優勝を果たしました。女子種目としては平成13年以来、実に19年ぶりのインターハイ制覇となりました。

台風10号の影響を受け、公式練習（トライアルレース）が中止となり、日程を繰り上げて8月12日よりレースが始まるという異例の大会となりました。本来は8月13日～16日まで全7レースで行われる予定であったインターハイ。自然に左右されるヨット競技とは言え、何レース行われるかも分からない、何日までレースができるかも分からない、言いようのない不安とプレッシャーを抱えて、生徒たちは高校生活総決算のレースに臨むことになりました。「レースを実施するかどうかは、自分たちでは決められない」「目の前のレースに全力を注ぐ」「一喜一憂しない」。自然の状況を受け入れ、自分たちの努力でできることに集中しきった生徒たちを誇りに思います。

インターハイ女子種目での光高校の活躍は、これまでの先輩たちの悲願でもありました。平成26年以降の5年間で光高校の男子チームは3度のインターハイ制覇を達成しました。国体に至っては6年連続で優勝し、将来のオリンピック選手を嘱望される優秀な選手が輩出しました。一方で女子チームは昨年まで3年連続で予選敗退。一昨年は同点で、昨年は2日目に逆転されて涙をのみました。「インターハイ・コンバインドでメダル獲得（3位入賞）！」。今年の光高校ヨット部の目標ですが、女子部員にとっては、未だ見たことのないインターハイ出場こそが切実な願いだったかもしれません。それが、優勝までしてしまおうとは…。

2018～2019シーズン。光高校ヨット部は新たな取り組みをスタートさせました。ヨット部内で男子チームと女子チームに分け、競い合いながら「チーム作り」を進めていきました。練習も別。大会の時も別。それまで優秀な男子部員に懸命についていくのが

常だった女子部員が、イキイキと活動しました。女子部員間で意見を出し合い、先輩・後輩を越えて励ましあい、助け合い、自分たちのチームを作り始めました。昨今の流行はアクティブラーニング。生徒がいかに主体的に活動していくように仕向けるか？時代は移ろい、さまざまな手法が紹介されていますが、育みたい力はいつでも一緒です。光高校の女子部員たちは見事に、自分たちのチームを作り上げました。想いを共有した、彼女たちだけの世界がそこにはあったと思います。

インターハイ会場には保護者の方の姿もありました。少し離れたところから、心の中で声援を送っておられました。ヨットという右も左もよく分からない競技。夏も冬も、雨の日も風の日も、クタクタになって帰ってくる我が子。心配で心配で堪らないことばかりだったと思います。そっと見守り、力強く支えていただき、ありがとうございます。揃いのユニフォームを作り、遊園地に遊びに行き、和歌山旅行を楽しんでいたことを…。素敵なサポーターの世界が

あったことを！  
令和元年8月16日。台風10号が過ぎ去ったあとのインターハイ閉会式。女子部員、男子部員、保護者の方、それぞれの世界が重なり合った光景は素晴らしいものでした。大きな大きな感動をありがとうございました！



## 「夢の舞台」〜書道パフォーマンス甲子園に出場して〜

山口県立山口高等学校 書道部顧問 有富 由美

「私を夢の舞台に連れてきてくれてありがとう」。書道パフォーマンス甲子園実行委員会から、本番前日交流会のスライド用に、顧問からの一言を、といわれ、迷い無くこの言葉を綴りました。

書道パフォーマンス甲子園とは、愛媛県四国中央市を会場に、全国からブロック予選を勝ち抜いた20校が一堂に会し、書とパフォーマンスの演技を競う大会であり、今年で12回目を迎える、書道パフォーマンスとしては唯一の全国大会です。その発祥は、愛媛県立三島高等学校書道部の生徒が、町おこしの一環として、紙のまち三島をPRしようと、特産品の紙に書道パフォーマンスを行って人々に披露したのが始まりとされています。それから12年、この大会は全国7ブロック106校が参加する大規模なものへと発展し、全国の書道部生徒の憧れの舞台、文字通り「甲子園」とネーミングされました。



しています。過去3年間は見事に玉砕！玉砕されつつも反省を生かし、自分たちの弱みを分析して、少しずつ進化させ、4年目の今年もめげずに高い壁に挑戦しました。DVDを提出してからは、もしかしたらいけるかも、という期待を打ち消すように1ヶ月を過ぎました。運命の6月18日、事務局から受けた電話の「おめでとうございます。本戦出場です。」という言葉に、驚きと喜びで受話器を持つ手の震えが止まりませんでした。これまで流してきた悔し涙が、今年は随喜の涙となりました。何度も何度も生徒と映像で見て憧れていた夢の舞台、そこに立てるのだという喜び。何事も諦めず努力すれば越え

られない壁はないことを学びました。本戦前日から四国に入り、リハーサル、用紙の貼り付けを済ませて、夜の交流会へ。そこでは書道に青春をかける高校生達の溢れ出るエネルギーや、絶対に優勝する！という気迫に圧倒され、同時に自分達に不足しているものにも気付かされました。危機感を感じた私達は、宿舎に戻ってから私の小さな部屋に12人が集まり、納得のいくまでミーティングをしました。

令和元年8月4日、この日は書道教師として最高の1日となりました。憧れの舞台は想像以上にすばらしい場所でした。初出場の本校は見るもの聞くものすべてが新鮮であり、名高い豪華校の舞台はもちろん、舞台裏も見られたことは大きな収穫でした。本番の出場順はちょうど真ん中の10番目。開会式の後、次々に隙間無くパワフルな演技が披露され、控え室のモニターを見ながら、緊張感はピークに達し、自分たちの本番を迎えました。6分間はあっという間でした。できあがりには決して満足のいくものではありませんでしたが、演技終了後の生徒達は、感激で涙する者、晴れやかな笑顔の者と様々でした。部長は「今までいろいろきついこと言っでごめんね。協力してくれてありがとう。」と、涙でつまりながら部員に感謝の言葉を述べました。その涙を見て、この生徒が抱えていたもの

重さを知り、熱いものがこみ上げ、涙がこぼれました。

毎晩遅くまで墨で真っ黒になりながら自分との戦いに耐え、頑張った生徒達、それを支えて下さった保護者の皆様、悔し涙を流して夢を諦めた歴代書道部の先輩達、今回ここに来られたのはそんな皆さんのおかげであり、あらためて「ありがとう」の言葉を送りたいと思います。そしてこの経験を生かし、来年さらに進化した姿を披露することを約束してご報告とさせていただきます。

